石巻市（河北地区・雄勝地区を含む）および東松島市の
婦人防火クラブ連合会ヒアリング記録

日　時　　2011年10月24日（月）14:00～

場　所　　石巻地区広域行政事務組合消防本部

参加者　　亀山　いつ子　　石巻地区婦人防火クラブ連絡会会長・河北地区会長
　　佐藤　きみ子　　雄勝町婦人防火クラブ会長・羽坂地区会長
　　山下　昭子（しょうこ）　雄勝町婦人防火クラブ副会長・雄勝地区会長
　　三浦　亨子（きょうこ）　東松島市婦人防火クラブ会長・小松地区会長
　　井上　はま江　　東松島市婦人防火クラブ副会長・大塩地区会長

左から山下さん、佐藤さん、亀山さん

左から井上さん、三浦さん

１．背景・概要

石巻市は平成17年4月1日に、桃生郡の桃生町・河南町・河北町・北上町・雄勝町、牡鹿郡牡鹿町と合併したため、北上川下流の平野部から女川町を除いた三陸海岸南端の牡鹿半島までの一帯を含む広い市域を持ち、160,692人・57,812世帯が暮らしていた（平成22年度の国勢調査より）。世界有数の漁場を三陸沖に抱くことから、石巻市は古くから日本を代表する水産都市のひとつであるが、内陸の平野部では稲作を中心とした農業も盛んである。東日本大震災においては、死者3,180人、行方不明者688人、全壊20,901棟、半壊4,102棟もの被害を出している（2011年11月13日現在）。

東松島市は、仙台市の北東、石巻市の西隣にあり、南は太平洋に面している。市の西北部は丘陵地が連なり、南は名勝「松島」の一角を占めるなど風光明媚な景観を形づくっている。沿岸部では養殖業が盛んで、内陸では稲作やハウス栽培などの農業も盛んである。震災前の人口は42,915人・13,997世帯であるが（平成22年度の国勢調査より）、東日本大震災では、死者1,044人、行方不明者94人、全壊5,432棟、半壊5,471棟に上った（2011年11月13日現在）。

このエリアでも婦人防火クラブの活動は活発に行われており、市域が広域のため被害の様相は地域によって異なっていたが、合併前の旧町単位での組織がしっかりと生きていたことで、被災直後の厳しい状況においても臨機応変な対応が可能であったと言える。

なお、石巻地区広域行政事務組合では、石巻市・東松島市に加えて女川町も管轄となっており、その人的被害の規模はあまりに大きかったため、救助や捜索は困難を極めている。

２．詳細

①それぞれの避難・対応状況

■亀山　いつ子　さん（石巻市河北地区）

震災時は石巻駅前の保健センターにいて被災したので、駐車場に止めておいた車で自宅へ向かおうとすると、出入り口のバーがあかずに皆がパニックのような状態になっていた。わたしはそのとき大津波警報が防災行政無線で発せられているのがわかり、ここまで津波が来るだろうと思ってすべての窓を開けた。そうこうしているうちに男性たちがバーを壊してくれたので中心部の方へ向かったが、「万が一のことがあった場合、この辺りなら見つけてもらえるだろう」という思いがよぎった。

そして道が渋滞して動けず、横道に入ってバイパスに出るがそこも通行できない。自宅へとにかく戻りたいと、開北橋へ向かうとやはり渋滞していたが、すれ違った一台のトラックの運転手さんが、「どこへ行きたいのか？」と声をかけてくれたので、河北地区だと伝えると、運転手さんはトラックを道に対して斜めに向けて後方の車両を止めて、わたしを河北地区方面に通してくれた。

同じ方向に行く車は一台もなかったが、とにかく地元に戻るとすぐ、一人ぐらしの高齢者のお宅を訪ねて回った。みなさん外にでて恐怖で震えており、水も電気もない中、ご飯もどうしたらよいか途方にくれているので、その日は家にあってすぐ食べられるものを提供しつつ過ごした。

河北地区は大災害を経験したことがないので、婦人防火クラブとして特段に何か申し合わせをしていたわけではなく、電話も通じないため、これは一人で行動を起こしていくしかないと思い、支所に何か支援できないかと話をした。しかし支所では、自分たちでなんとかしてくれと言われたため、自宅にあったお米と鍋等を小学校の避難所へもっていきご飯を炊いた。

翌日から日赤のヘリによって、津波で体が弱った人たちが河北小学校に運ばれて来た。下着が津波で持っていかれて下半身に何も身に着けていないひと、オムツがパンパンに膨れた状態の赤ちゃん、失禁しているひとなど、とても悲惨な状況だった。そこで近所の人にお願いして、服やオムツなど提供をよびかけた。そしてこうした状況を役場の支所に伝えに行くと、全くこうした状況を知らなかったようで、保健師さんの派遣などの支援に動いてくれることになった。その後、体が弱った方たちは河北中学校に移送された。

学校ではプロパンガスが使えたので、調理室を使い、鍋も自宅から持ってきてご飯を炊いたり、ほかの方に自宅でカレーなどを作ってきてもらって提供した。また行政委員を通しておにぎりをつくって届けてほしいといわれ、婦人防火クラブでは地区ごとに11時と4時に1週間食事を提供した。

また、ビックバンという施設に500～600人が避難していたが、ここでは防火クラブと民生委員、利用者協議会の合同で炊き出しを実施し、5月半ばぐらいまで継続したが、農繁期となることからその時期で終了とした。

ただ、2日目くらいからは外部からぼちぼちと支援が入るようになったこと、水も電気もみな通常通り使えたので恵まれていたと思う。

■佐藤　きみ子　さん（石巻市雄勝町）

雄勝地区は人口約4千人で、クラブは8支部ある。震災時、わたしは自宅で夫といたが、揺れで立っていられない状況の中、ブレーカだけおろし、外で物干し台にすがり付いていた。瓦も音をたてており恐ろしかった。

防災無線で大津波警報が伝えられたが、聞こえたのはその1回で、2回目以後は無線が壊れて伝えられなかった。
わたしの自宅は高台にあるので、直後に海を見るとまだ大丈夫そうだったが、しばらくしてから海面が膨れ上がり、防波堤の高さまで上がったと思うと、引き潮で大きな渦が巻き船が流されていった。その後煙があがり、バリバリと大きな音がして、家や車がクルクルと流される形で津波が押し寄せてきたが、その光景に足がガタガタ震えた。わたしの地区でも40軒中7軒ほどが流されてしまった。
そこで、はじめは地区内にある避難所に指定された施設に向かおうとするが、築40年で危険だということで小学校へ向かった。体育館に約740人が避難してきていたが、1日目は食事は何もなかった。
翌日からは調理室で、流されてきたプロパンガスも拾ってきて使いながら、米や味噌を各自出しあい、鍋や釜を持ち寄ってご飯を作ったが、はじめのうちは全員分などとてもつくれない状況だった。
2日目に、アメリカの艦隊などが沖合に4隻泊まり、米兵がおにぎりを作って陸路もってきてくれた時は涙が出た。英語で何か必要なものはないかと聞かれるが、会話ができる者がおらず、いろいろ話をしてみたがガソリンだけはなんとか通じたようだった。2～3日目には支援物資が入り始め、また石巻の市街地から3日ほどかけてようやく帰ってきた人がいるような状況だった。
避難所では自分たちで対策本部を立ち上げて、1日に2回会議をおこなった。初期はとにかく近所から食材を持ち寄ってもらって、玄米を精米するなどいろいろ工夫して対処した。食器も足りないので、各家庭から持ち寄ってきてもらい、また水汲み隊、〇〇隊といった形でいろいろなチームを作って対応した。避難所運営における班編成は、みなさんの自主性におまかせするなど、口をださないところは出さないようにした。もちろん、大事な問題があれば、それははっきりと指摘して改善にもっていった。
これまで訓練をやってきたが、それらは直接的には役立たなかった。機材も方法もまったく違う形で対応しなければなかった。
5月いっぱい避難所にいたが、トイレもたいへんだった。孫世代の子どもたちが一生懸命掃除をしているのに、それを使う大人や高齢者が何もしないような状況もあったので、役割分担をし、できるひとは少しずつみんなで協力できる体制をつくっていった。憎まれてもいいとおもった。
また、食事の支度も3班にわけて順番におこなうようにし、1日担当したら2日は休めるようにすることで、体を休めたり家の様子を見に行ったりできるようにした。物資の仕分けも行ったが大変だった。また、後からボランティアさんもたくさん支援に入ってくれて助かった。
ただ、わたしは避難所を離れることができず、ほとんど家の様子は見に行けなかった。夫だけ先に自宅に戻ってもらった。

■山下　昭子 さん（石巻市雄勝地区）

私は今回の津波で自宅を失い、病弱だった夫は避難生活の中、震災後1ヶ月を経ずして亡くなり、今は息子と仮設住宅に暮らしている。
震災の時は、頼まれて手伝っていたうどん屋での仕事を終えて、普段ならお茶などして用事を済ませてから帰るところを、たまたま早く帰宅して自宅にいた。激しい揺れに驚くが、夫がすぐに「大津波が来るから逃げろ！」という。体の悪い夫は、自分で上着を着て先に裏の畑の方へ登っていき、わたしは車に飼い犬を乗せてすぐ移動できる状態にしておいて高台に上がった。
高台には地区の人たちが50人ほど集まっており、海を見ていると「来たーっ！！」という声が上がる。すると高く上がる潮煙が見え、そのまま陸に迫ってきて、3階建の役場も一気に飲み込んでいくのが見えた。泥のような水が何もかも流し、わたしの車も流れていった。そして雪が降ってきたので、焚き火を炊いて一晩そこでみんなで過ごした。
翌日、全員集まってくれと声がかかり、指定されていた避難所に向かうことになったが、取り残される人がいないかどうか点呼を取った上で、木や藪が生い茂る箇所にはロープを張り、みんなでそれを頼りに山肌を下った。

あたりを見回すと、わたしが自宅で食材をぎっしりストックしていたストッカーがそのまま流れてきており、避難所へ持って行きみんなで分け合った。水は、沢水を引いて使っているお宅があったので分けてもらい、近所からいただいたお米で炊き出しをした。釜は役場から来たような気がする。
その後、もっと安全な場所へ船で移動するように言われ、船着場まで歩いていくが、途中で夫が歩けなくなり「もう逃げなくていいから置いていってくれ」と言う。その後も立ち上がっては数歩歩いて座り込む状態だったので、周囲の人に背負ってもらって船に乗り、さらに車で別の地区の避難所へ入った。しかしその環境では夫の体が持たないため、知人のとんかつ屋を営んでいる人にお願いして、そちらでしばらく過ごさせてもらうことにした。
4月半ばまでそこでお世話になったが、途中で夫の具合が悪くなり、結局4月7日に亡くなった。病院にもいけなかったし、また亡くなっても遺体を置く場所もないなど、本当に全てが悲しかった。
津波にあった人は下着などがみな剥ぎ取られた状態で（特に女性）、泥の下2Mから遺体が見つかったケースもあった。木にぶら下がった状態で亡くなっている人、車から足が出た状態の人など、本当にひどい状態だった。火葬場も流されてしまった。山津波のようだった。

■三浦　享子　さん（東松島市）

地震のときは、仕事で矢本のコミュニティセンターにいた。自分は仕事の終わる時間が近かったので、片付け始めると地震が来たが、音がものすごく逃げることもできない。
揺れが収まってから家に行くと、中はもうぐちゃぐちゃだった。デイサービスに行っている夫を迎えにいくため、毛布を押入れから取り出そうとするが、扉がゆがんで開かず、仕方なく無理やり引っ張り出して車に積み、45号線に出ようとした。
しかし行く先々で、ここから先は水が出ている、こっちはだめだ、と止められることを繰り返しているうちに、渋滞で身動きが取れなくなり、車の流れにまかせていると結局、夜の8時か9時ごろに運動公園の駐車場に入ることになった。仕方ないので、そこで毛布に包まって一晩すごした。
翌日の朝、自宅へ戻ってから近くの避難所に朝10時ごろ行くと、わたしが津波の被害にあったのではないか、と心配していた知り合いたちに、「三浦さーん！」と喜んで声をかけられた。そして、避難所では昨晩も今朝も何もたべていないというので、炊き出しをすることを決め、早速各家からいろいろと持ち寄った。机の上に食材を並べて、その中で何がつくれるか話し合い、肉もなかったがいろいろなものを煮込んでカレーを作り、区長さんが持ってきてくれた5升ほどのお米を利用してご飯を炊き、カレーライスを提供した。
ご飯は、防災用の釜にお米を研がずに入れ水を注ぎ、木を燃やして炊いた。ガスのようにうまくできず、よく炊けた一番上の層と、芯のあるごはんの中間層、そしてあまり煮えていない一番下の層と3層になっていたが、それらを混ぜて盛りつけ、カレーをかけてお出ししたところ、みな喜んでくれた。
このように2日目にすでにみんなの協力でカレーを提供したが、後でいろいろ聞くと、ある避難所では、1本のジュースを一口ずつ回しのみしようということになったが、ひとりだけ二口飲んでしまったひとがいてあとあとまで厳しく非難されるということもあったという。また、バナナ１本を四等分して分けたなど、食事に関しては厳しい状態だった。
そのうちお弁当がある程度出るようになってくると、おにぎりでは物足りないときも出てきたので、味噌汁も途中から作るようにし、時には味噌汁におにぎりを入れて雑炊風にするなど工夫した。
消防団では、車を一台置いて、夜はそのライトを仮設トイレの周りに照らしてくれていた。消防団員のみなさんは遺体捜索で毎日たいへんな思いをしていたので、わたしはこっそりとパンなどをとっておいて、出先で食べてもらえるように出発前に渡し、帰ってくるとお話を横でうかがうなどしていた。怖くないのかともおもったが、棒で泥の中を刺しながら捜索し、ご遺体が見つかると、よかったなあ、と思い、そしていとおしく感じるのだという。彼らも影で泣きながらがんばり続けていた。わたしは毎日、いってらっしゃい！お帰りなさい！とみなさんに声をかけ続けた。

最初はなにもない中で約1週間やりくりし、その後少しずつはものが入ってきたが、みんなで協力しあいながら20日間こうして避難所で過ごした。1日2食炊き出しを行い、昼間はあまったパンなどを食べてもらい、わたしは家の片付けなどもおこなった。
日にちがたつと徐々に避難所の人数も減り、20日目にお別れ会をしてその避難所は閉鎖された。しかし市内の状況はまだまだひどく、自宅に戻ってからも歯がゆい思いでいたが、県外からのボランティアがたくさん入り始めたため、まずボランティアセンターで地図だし（来たボランティアさんに市内の地理情報について地図を出しながら説明する役目）のお手伝いを一週間ほどおこなった。
すると、ボランティアさんたちがお昼はコンビニ弁当、飲物は自販機で買ってのむという生活で支援してくれているのがわかったので、他地区の防火クラブのお仲間にも声をかけて、ボランティアさん向けの炊き出しを実施した。「つゆの会」という任意団体を臨時で立ち上げ、赤い羽根の共同募金の支援金を受けて、週２回、火曜日には味噌汁と金曜日にはうどん汁と決めて、ボランティアさんに提供した。ボランティアさんともいろいろと会話をさせていただいたが、本当にいろいろな人、年齢層のひとがきてくれたが、災害ボランティアセンターが閉じるまで支援を継続した。
5月末ごろから会員さんの安否確認のため、避難所を回るなどしたが、会員さんも10名ほどが犠牲になられたことが分かった。

■井上　はま江　さん（東松島市）

わたしは大塩地区に暮らしており、自宅は水も入らずに無事だったが、電話は通じずガソリンも手に入らず移動が難しい状況だった。地区では防災無線によって、婦人防火クラブに向けて、炊き出しを避難所で実施してほしいとの呼びかけがあったのだが、わたしはそれを聞けておらず、翌々日避難所へ行くと、１千個以上のおにぎりをみなさんで炊き出してくれていたので、そちらを手伝った。
行方がわからなかった娘を4日目ぐらいにようやく避難所で見つけて安堵した。
大塩地区では、三浦会長の呼びかけを受けて、ボランティア支援の炊き出しや仮設住宅などでの防火啓発活動に参加している。ボランティアの炊き出し支援は、地区全体に声をかけ、できる人にローテーションで5人ぐらいずつ出てもらって実施した。

②全般（婦防全体としての活動や個別課題など）

■炊き出し・物資ほか

〇震災前の1月29日に、炊き出し訓練を実施したが、水がなかったので研がずに釜に米を入れて炊いたのが良い経験となった。震災後は練炭になべをかけて炊いたが、1週間から10日ほどこれで対応した。
〇大きい避難所はきちんと支援がくるが、在宅避難には来なかった。2回ぐらい地域として物資をもらいに行ったがそれきり。赤ちゃん用のミルクが必要になったときなどには、役場にもらいにいったことがある。
〇物資などの支援は、在宅避難者にはなかなか届かなかった。また地域での物資配分の対応については、区長や行政委員さんの姿勢によると思う。私の地区では区長に働きかけ、避難所にきた物資の一部を袋に分けて、地域の仲間である在宅避難者のみなさんに届ける活動もおこなったが、これはたいへん喜ばれた。
〇自分は避難所運営で離れなかったので、物資はほとんどもらえていない。地区で物資を配った際、そのとき家にいればもらえるがそうでなければやらない、という方針で配布がおこなわれたためであ

るが、これはおかしいと思う。

■婦人防火クラブとして

〇当初は電話も通じなかったので、支所等で声をかけあったり安否を聞いたりして状況を徐々に把握したような状態だった。
〇後日安否の状況がわからない会員さんのお宅を訪ねると、自分のところは被害を受けていないので、顔をだしていいものかどうか悩み、表に出て行けなかった、という方もいた。
〇自分の地区の婦人防火クラブについては、役がまわってきたからとりあえずしばらくやるか、といったような受身の感覚だったので、震災前にちょうど「これからはもう少し意識を高めていこう！」と話し合っていた。しかし今回、地区によっては大被害を受け、仮設住まいの方もいたりするため、組織の活性化ということでは難しい状況になってしまった。

■関係団体との協力の在り方

〇合併前には、年に一度の6.11の防災訓練の際には、社会福祉協議会・日赤と婦人防火クラブとが事前に調整して炊き出し等に取り組むという形にしていた。しかし年齢が高い方たちが多く、わたしたちは小さくなっていたような感じではあったが、防災訓練については最近は婦人防火クラブが主体になる傾向にある。
〇婦人会も防火クラブも会員は重なっているのでそこも大きな問題はない。
〇3年ほど前に自主防災組織が立ち上がったが、婦人防火クラブとしてではなく一市民として参加してくれと言われて、個別に参加することになった結果、婦人防火クラブは地域の防災活動ラインからややはずれてしまったような状況がある。

■仮設住宅

〇石巻市河北地区では9月末にようやく役員会を開き、できる範囲で活動を再開しましようと、支所とともにステッカーを作って、400戸ある仮設住宅での防火啓発をして回る予定である。
〇東松島市では、9月上旬にはすべての避難所の方が仮設住宅等に移動したが、仮設住宅の支援こそ地元の役割と考え、現在活動を少しずつ実施している。婦人防火クラブの役員会を開催し、できる人だけでかまわないので、地域ごとに日にちをきめて、一声かけつつ地域を回ろうということで、9月26日から取り組んでいる。なんでもいいから手渡しできるものを、と考え、火災予防のチラシをつくってもらい、これを配布した。自分の新しい住所も覚えられない人が多いだろうから、現住所を書き込める欄も作った。活動をはじめて10日すぎたころ、ある仮設住宅の真向かいで、3軒も焼ける火事がでてしまったが、取り組みの重要性を改めて感じた。仮設住宅は１千数百戸あるが、すべての住宅で安否確認活動をしていきたい。

３．今後に向けてとメッセージ

■分析

○いずれの地域においても、地震と津波の直後より炊き出しや物資の確保等の支援活動をすばやく開始している。
○これまでの訓練が直接的には役立たなかったとの意見も聞かれたが、日ごろの訓練と地域内や他地域との関係性を構築していたからこそ、応用力をもって事態に対応できたと評価すべきであろう。
○石巻市一帯と東松島市では、婦人防火クラブの存在は大きく、他の女性組織等との関係上の活動課題はあまり聞かれなかった。
○ただし、自主防災組織との関係については、一部課題が見られた。具体的には、自主防災組織の立ち上げとともに、地区ごとに個人で参加してほしいということになった結果、婦人防火クラブという組織としては、自主防災活動のメインストリームからやや外れてしまったというものである。こうした形は、組織としての力を生かしにくくなるため、地域全体の防災力向上という視点にたち、関係の在り方を見直す機会も期待されるところである。

■組織の今後

○雄勝地区で11名の会員が亡くなっている。消防団も解散してしまっているので婦人防火クラブも厳しい状況であるが、組織をなくしてしまってはいけないので、とりあえず震災時の役員さんに継続してもらっている。現在仮設住宅に移っている山下さんにも役員を継続してもらっている。
○石巻市河北地区では、総会も何もできておらず、役員改選開行っていない。3月9日にどなたに役員になっていただくか話し合っていたが、お願いするはずになっていた方が亡くなるなどしている。9月26日に役員会を開き、できる範囲で活動を再開しましょうということになり、支所とともにステッカーを作って、400戸ある仮設住宅を消防団の方たちとともに、防火啓発などをして回る予定である。本格的な活動は、1月の出初式から再開しようと考えている。
○東松島市は13地区あり、そのうち11地区に婦人防火クラブがあるが、今年度は、総会も役員改選もできていない。いま会長を辞めると逃げるような状況になってしまうので、とりあえず現状では続けることにしている。ただし被害があまりに大きく、防火クラブを解散したいという地域もある上、仮設住宅の期限は2年であり、復興街づくりも移転の方向性もきまっておらず、先が見えない状況。今夜ちょうど消防団と火災予防運動等の会議があるなど、少しずつ取り組みを再開しながら様子を見て考えていきたい。

■メッセージ

○教訓は、基本は、自助、共助、公助であり、いま振り返ると自然に取り組みをしていたところが大きい。しかしあのときは無意識だった。
○日ごろからの準備や訓練が重要。炊き出し訓練も無駄ではない。
○大きい地震はないなどとは思わないことが大切。
○避難誘導をしていて、お役がらで亡くなった人も多いだろう。しかし命が一番大切なので、津波てんでんこも重要ではないかと思う。
○いろいろな応援をいただきありがとうございます。

（以上）